

平成27年度 政務活動報告書

会派又は議員名 鈴木 岩夫

政務活動期間	6月30日(火)、7月1日(水) (2日間)
政務活動先	鶴居村、弟子屈町、標茶町
政務活動参加者	鈴木岩夫 (1名)
政務活動項目	<ul style="list-style-type: none">○人口減少対策について○学力向上の取り組みについて○観光振興と道の駅について○環境教育の取り組みについて○子ども・子育て支援について
政務活動項目に係る (目的・結果等の概要・所見)	別添のとおり

2015年8月7日

当別町議会
議長 後藤 正洋 様

当別町議会
議員 鈴木 岩夫

政務活動研修報告

- 1 鶴居村
日時 平成 27 年 6 月 30 日 (火) 午後 3 時～午後 4 時 30 分
研修事項 ・人口減少対策について
・学力向上の取り組みについて
- 2 弟子屈町
日時 平成 27 年 7 月 1 日 (水) 午前 10 時～午前 11 時 30 分
研修事項 ・観光振興と道の駅について
・環境教育の取り組みについて
- 3 標茶町
日時 平成 27 年 7 月 1 日 (水) 午後 4 時～午後 5 時 30 分
研修事項 ・子ども・子育て支援について

1 鶴居村政務活動研修報告

(1) 課題意識

昨年、「地方消滅、自治体消滅」というタイトルの、いわゆる「増田レポート」が世に出されて多くの自治体は、大変ショッキングな報告と受け止めました。なんとといっても一万人以下の自治体は、ここ数十年の間に無くなってしまおうというのだから。

そんな中、一番初めに無くなってしまおうだろう 2,500 人足らずの鶴居村が、釧路市から 30 分以内と海霧の入らない内陸という地の利を生かして積極的な宅地造成で人口を減らしていないということを伝えて聞いていました。実際は、どうなのだろうか。

また、塾もない農村地帯の小さな学校の子どもたちが、全国学力テストで全国トップレベルの結果を残していることが報道されました。いったいどのような取り組みで、そのような結果を生み出しているのだろうか。

以上のような課題意識を持って鶴居村政務活動研修に臨みました。

(2) 見通し・予想

(1) のような課題意識と同時に自分なりの見通し・予想を持っても望みました。

私は、8 年前まで、鶴居村幌呂に居住していました。当時も、下幌呂地域では宅地造成を進めており釧

路管内の退職教職員を中心に移住・新築する「ブーム」みたいなものがありました。まるで「教職員団地」の様でした。また、鶴居村を拠点に釧路管内の他の町村にも通勤可能ということで退職教職員だけでなく現職の教職員も移住・新築するケースが増えていました。

そして、釧路管内の他の町村に比べ「子育て支援策」が行き届いており子育て中の世代が移住してくるケースが目立ちました。

更には、どの町村もそうでしたが、児童1名増えることによって学級数が維持できたり、1学級増えたりということで、該当児童を持つ教職員の人事異動を積極的に受け入れていたように記憶しています。

8年経過して状況がどう変化しているのか楽しみに臨みました。

(3) 積極的な施策

教育長より「本年度の重点と主な施策」と題して説明を受けました。

印象深かったのは、報道では、ことさら「学力」が取り上げられているが、「たくましく生き抜いていく力」～「総合力」を育成する教育活動を推進しているということでした。その内容として、第1に「豊かな心」、第2に「健やかな体」、第3に「確かな学力」をあげていました。

そして、学校・地域の特色や良さを十分生かした鶴居村ならではの教育活動を推進しているということでした。その内容として、第1に「児童生徒一人ひとりの実態や学校毎の課題や状況を踏まえた地域の特色を生かした学校ならではの実践」、第2に、「鶴居の教育を支える教育関係団体の組織的な役割と機能的な活動及び実践」、第3に「信頼される学校づくりに向けた学校間の連携の推進と教職員の資質・能力向上への体制づくり」をあげていました。

更には、時代の変化に対応した特色ある教育活動の展開に対応するとともに安全・安心な学習・生活環境を確保するための施設・設備の整備・充実に取り組んでいました。その内容として、第1に「児童生徒が安心して学ぶことができる学校施設の耐震工事及び改修工事と環境整備」、第2に「円滑なる教育活動を推進していくための学校施設設備の改修と営繕」、第3に「子育ておよび人材育成に向けた支援と児童生徒の実態や学校の実情に応じた人的、物的環境の配置並びに整備」に全力挙げて取り組んでいました。

- ① ソフト面では、特別支援員の配置について、村費を持って小学校5人、中学校1人を配置していました。
- ② 村内小・中5校、児童・生徒数247名に対して83名の教職員配置となっていました。マンツーマン指導に近いゆきとどいた指導が行われていました。
- ③ 平成20年では委託事業だった学校と地域の双方向の教育活動「稲作り体験」や「丹頂鯛づくりプロジェクト」、「職場体験学習」などの事業が、平成23年度からは補助事業として充実していました。
- ④ 放課後児童クラブ「青空キッズ」は、図書館に併設された空間で実施されていて、まずは、「宿題」から始め「読書」や「遊び」といったスケジュールが確立されていました。
- ⑤ 平成26年度全国学力テストの「国語A」と「算数A」は、高得点となっていて、これは、小学校3校の6年生全体が高いレベルであることと、6年生22名の中で成績下位者がいないということが大きな要因であると分析されていました。これは、私の予想通りでした。
- ⑥ 鶴居村には高校はありません。釧路市への通学となります。今年度より、通学にかかる費用の助成を

開始したとのことでした。このことも、親御さんや生徒を励ますことにつながっているのではないのでしょうか。

(4) 予想をはるかに超える施策

周辺の市町村に比べて支援学級の多さに驚きました。それには、多少お金がかかっても対象児童を積極的に受け入れることによって、充実した教育環境・ゆきとどいた教育の鶴居村というイメージを、とりわけて釧路市民に与え家族そろっての移住者が増えているそうです。また、児童生徒に対する医療費無料化をはじめ、高校生の通学費用の助成といった積極的な施策が、自然環境を生かした宅地造成も相まって移住者を増やしていました。

平成の合併を拒み、豊かな財政力を背景に独自の取り組み、積極的な施策が功を奏している印象を得ました。それは、私の予想をはるかに超えるもので大変勉強になる政務活動研修でした。

2 弟子屈町政務活動研修報告

(1) 課題意識

数年前までは、「ピラオ民芸館」という個人所有の建物の前に小さな道の駅がありました。駐車場とトイレ、観光パンフレットが置いてある程度の「さびしい」道の駅の印象が残っています。観光客の減少で、「ピラオ民芸館」も閉じていました。

また、ホテルや旅館も次から次へと廃業していっていました。

10年前の知床の世界自然遺産登録という追い風が少しはありましたが、なかなか成果は上らず苦戦していました。

ところが、弟子屈の「道の駅」が旅行雑誌「じゃらん」でナンバーワンという報道を耳にして驚きました。ちょうど当別町でも、「道の駅」建設に取り組んでいるということもあり、強い興味関心を持ちました。そして、どのようにして観光客が大挙して訪れるようになったのだろうと思いました。

そして、また、鶴居村は別ですが、どの町村も「財政難」に苦しんでいました。弟子屈町も例外ではありませんでした。弟子屈町は、珍しく飛行場を有している町でした。かつてその飛行場を利用した事業が小学校高学年を対象にして取り組まれていました。夏休みの「遊覧飛行」です。それから、小学校中学年を対象に観光船による屈斜路湖の「遊覧」も取り組まれていました。しかし、それらの事業が「財政難」と天候に左右されるという理由で取りやめになりました。その時、町長・教育長より、町内教職員に対して率直に相談・協力の話がありました。「町おこしのために知恵と力を貸してほしい。」と。校長会にまとめ役がゆだねられました。そして、提案されたのが、小・中・高連携による「クリーン作戦」でした。提案されてから実施されるまでは、教職員の受けはあまりよくありませんでした。しかし、「クリーン作戦」が実施され、終了して職員室に戻ってきた教職員からは、「校長先生、よかった。よかった。最高！」という声有谁からも聞かれたのです。幼稚園・保育所も、自主的に参加しました。町のあちこちで、子どもたちの挨拶と、町民が子どもたちに声をかける姿が目立ちました。町民からは、「先生方、いいことしてくれた。町が一つになった感じがする。」という感想も聞かれました。「たかが、ゴミ拾い。

されど、ゴミ拾い。」です。観光の町弟子屈町にはびっぴりの行事でした。

更には、環境教育の充実ということで、道教育大釧路校との「連携協定」も結びました。その橋渡しの役も引き受けさせてもらいました。その後、それらの事業は、どうなっているのだろうと思いました。

(2) 見通し・予想

8年前、弟子屈小学校に勤めている時、どうにかかつてのような観光客でにぎわう町を取り戻そうと町一丸となって取り組んでいたことを記憶しています。かつては世界一を誇る透明度の摩周湖は、今ではロシアのバイカル湖に追い越されてしまいました。原因は、車の排気ガスではないか、ということで排気ガス濃度を測定したり、入り口から摩周湖までの行程を乗用車の通行をストップさせて、シャトルバスでの運行を試みたり、様々な実証実験に取り組んでいました。

弟子屈高校では、ボランティア部の生徒たちが飲食店で使われた割り箸を回収して「炭」を作って再利用する取り組みをしていました。また、弟子屈中学校では、給食に出た牛乳パックを捨てないで水洗いしリサイクル業者に回収してもらっていました。総合的な学習の時間、「環境問題」に取り組んでいた受け持ちの高学年の子どもたちが、そのことを聞いて「自分たちもしよう。」と取り組み始め、そして、自分たちが取り組むだけでなく他の学級にも呼び掛けるといった積極的な学びをしました。それから、牛乳パックを洗う時に使う水にも着目しました。どのようにしたら、水を節約できて牛乳パックをきれいに洗うことができるかを考え実践しました。ちょうど世界的にも「もったいない」といった言葉が広まり、小・中・校での環境教育の効果もあって、それまで給食で使われていた割り箸が、繰り返し洗って使える箸に変わりました。財政的にも効果がありました。

子どもたちは、釧路管内の小中学校に電話をかけ、それぞれの学校が給食の割り箸や牛乳パックの取り扱いについて調べ、自分たちの環境や取り組みについて認識を深めていきました。更には、給食で使われる割り箸が、どのように作られているのか、どのくらいの木材が使われているのかを調べ、地元の木工場を訪問し、木を育てる過程や苦勞を聞きます。そのような学習があって、卒業学年で取り組む「植林」の事業がとても意味あるものになっていきます。

(3) 積極的な施策

数年前、「道の駅」の前にあった個人の施設である「ビラオ民芸館」が新しい「道の駅」になっていた。町が買い取り、「道の駅」にリニューアルしたとのこと。温泉のまちらしく、足湯の施設や公衆温泉場も併設してりました。勿論、弟子屈町の特産品を販売するコーナーがあります。町あげて特産品開発にも力を入れています。

美術館やレストラン、雑貨を売る店も並びます。釧路川を挟んで向かい側にはキャンプ場も備えた公園もあります。近くにはペンションもあります。

「道の駅」の周りは、花で飾られています。その花を遠くから見学に来る団体も多いそうです。聞くと、ドイツをはじめヨーロッパまで花壇の研修に出かけ、その成果をすぐ生かし、マスコミの協力も得て広く発信する努力をしています。花だけではなく、弟子屈のシンボルでもある「摩周湖」の貴重な映像も、マスコミの協力を得て広く発信する努力をしています。その甲斐あって、入込数の増加につなが

り旅行雑誌「じゃらん」でナンバーワンという成果を得ています。

「クリーン作戦」は、今は、「グリーン作戦」に替わっていました。「クリーン作戦」は、町内の少年団に加入する子どもたちが取り組むようになっていたり、各学校で実施される遠足などの帰り道自主的にゴミ拾いするなどが広まったりしたため、「森と湖のまち」として大規模な「植樹」に取り組むことにしたそうです。これまで、小学校の卒業学年が取り組んでいた事業を発展させたものになっていました。

正確には、「クリーンタッチ事業」（ゴミ拾い）平成 18～21 年度

「グリーンタッチ事業」（植林作業）平成 22～24 年度

「ジュニアパークレンジャー事業」（外来生物の駆除活動）平成 25～27 年度

が、①弟子屈町の子どもたちが、外来種駆除の活動を通して、自然環境について総合的に学び、考える契機とする。

②観光のまちとして自然環境を守り育てる活動を通して、社会の一員として貢献し、ふるさとを愛する心を培う。

③異種間の園児・児童・生徒の共同作業を通して、リーダーシップやフォロワーシップ等の人間関係の基礎を培う。ことを趣旨に、弟子屈町ジュニア・パーク・レンジャー実行委員会主催、弟子屈町・弟子屈町教育委員会、環境省/釧路自然環境事務所、国土交通省/釧路開発建設部、川湯エコミュージアムセンター、一般財団法人自然公園財団川湯支部、摩周・屈斜路湖パークボランティア連絡会後援で取り組まれていました。

道教育大釧路校としては、「僻地複式教育」といった特色ある教育課程を充実させるという方向性と弟子屈町としては、「環境教育」の充実という方向性が一致し、双方「連携協定」の内容充実に向けて力を入れて取り組んでいるということでした。

(4) 大事なことは、町民参加のまちづくり

平成 20 年、行政や商工会、旅館組合や観光事業者らが中心となり、地域再生に取り組みたいと協議し、「誰もが自慢し、誰もが誇れる町」を目指し、「てしかがえこまち推進協議会」を立ち上げました。以来、生まれ変わったように地域が動き出したそうです。それは、何より地域住民が主役となっているからだと思います。住民であれば誰でも参加でき、個々の意見を地域づくりに反映できる場が、「てしかがえこまち推進協議会」の核だからであるといえます。

新たな観光を創造する「地域力」と銘打って始まった「てしかがえこまち推進協議会」だが、その「地域力」の実現に向けては、8つからなる専門部会がそれぞれ独自に、時には連携して、多彩な事業展開を行っている。町内のエコツーリズムでの地域振興を進める「エコツーリズム推進部会」、てしかが観光ポータルサイトを通じて、様々な情報を発信する「情報部会」、女性の視点での地域振興を進める「女性部会」、地域の観光分野における人財を育成する「人財育成部会」、地域の食文化の研究や地域食材のPRなどを進める「食・文化部会」、地域の環境保全や温泉に関する取り組みを進める「環境・温泉部会」、地域のユニバーサルデザインを進める「UD部会」、芸術による地域振興を進める「A&A部会」が、アイデアを出し合い活発な議論を重ねながら「誰もが自慢し、誰もが誇れるまち」をめざし、日々精力的な取り組みを続けているという。幼・小・中・高・大連携の教育も観光も、町民参加のまちづくりという核がしっかり根付いているように思えました。

3 標茶屈町政務活動研修報告

(1) 課題意識

当別町は、小学校入学前の児童の医療費（入院・通院）の助成を独自に行っています。また、道は、小学校卒業までの医療費（入院・指定訪問看護）の助成を行っています。

全国的には、すでに小学校卒業までの医療費（入院・通院）の助成は、8割の自治体で、中学校卒業までは、6割の自治体で医療費（入院・通院）の助成を実施しています。

私は、道の施策を補う形でせめて小学校卒業までの医療費（入院・訪問看護・通院）の助成を独自に行ってはどうかと考えています。勿論、中学卒業・高校卒業まで実施できることにこしたことはありません。しかし、財政難でなかなか思い切って実施できないという町のふところ事情も何となく理解(?)しています。

そんな折、人口減少に歯止めをかけるべく「まち・人・しごと創生総合戦略」なる国の方針が出されました。このもとになった、いわゆる「増田レポート」でも人口減少に歯止めをかける対策として子育て世代に対する手厚い支援の必要性を説いています。

当別町も、例外なく人口減少が顕著に表れています。さらに深刻なのは、特殊出生率が、何と全国ワーストワンという実態です。当別町にとって、人口減少対策は待ったなしの課題です。

6月議会では、他議員も、人口減少に歯止めをかける対策として子育て世代に対する手厚い支援を町長に質しました。しかし、やはり町長の答弁は、「財政難」を理由に難しいという答弁でした。

私は、当別町だけが「財政難」なのか、他の町村ができて当別町では無理なのか、財政についてもっと突っ込んだというか、掘り下げた検討が必要だと思いました。

町長は、また、二人目の他議員の質問に対して、「単独での実施は無理」とも答弁しました。私は、標茶町が、単独ではなく町の商工振興との抱き合わせで実施していることを聞いていたので、今回の政務活動視察研修先に標茶町を選びました。

(2) 見通し・予想

標茶町も、人口減少が著しいと聞いていました。特に市街地周辺部の人口流出が激しく、それまであった商店の撤退でいわゆる「買い物難民」をどう救うかが大きな課題だと聞いていました。と同時に、撤退を余儀なくされる商店の経営も大きな課題です。いわゆる「シャッター通り」をどうするか、と言ってもいいと思います。ここを統一的に考えて方策を考え、知恵を出していったのではないかと思います。

「ダメでもともと」「案ずるより産むがやすし」「きっといい案があるはず」といったポジティブ思考で、住民のニーズに応じていく姿勢を大切にしているのではないかと思います。

(3) 積極的な国や道の施策の利活用と、創意工夫

国や道の施策には、「財政難」の自治体にとって利活用できればどんなに助かるかといった内容のもの

があります。しかし、様々な条件があり利活用するには難しい面があり、あきらめてしまうことがほとんどであると聞きました。

それでも、あきらめきれず直接実施省庁に相談をしたところ、利活用についてのアドバイスを受け、実施できるようになったとも聞きました。そして、そのアドバイスは、できるだけ自分たちの省庁の事業について利活用してもらおうというものだそうです。

財政難で「単独」の事業展開が難しければ、どうにかいい方法はないかと関係方面と協議し「いい知恵」を出し合うといった創意工夫が、新しい事業展開に結びついていました。「買い物難民」をどうにかしたいと相談を持ちかけ協力関係を作ってきた商工会との協議が、「財政難」という大きな難問を乗り越えることにつながりました。一つの事業展開が、住民の福祉と町の商工振興という二つの効果を生む事業へと発展していきました。

(4) まちづくりのために知恵と力を合わせて

「ミルクつく券」という名称の事業がありました。乳幼児に対する助成事業で、町内の商店街で乳幼児が必要な粉ミルクや紙おむつといったものと交換できる商品券だそうです。これを事業化するのに町と農協が事業費の3分の1を負担しているそうです。私が、「へえ、そうなんですか。」と驚くと、職員の方が、「町も、農家さんのためにかなり出していますから。」という説明でした。

「持ちつ持たれつ」「お互い様」といった言葉があります。職員の皆さんの話を聞いていて思ったことは、まちづくりには、その精神も大切なんだなと思いました。

厚生労働省の「ファミリーサポート」という事業があります。これは、このサービスを利用したい方が100名以上ということが条件だそうです。しかし、標茶町は、人口6,000名足らずの小さな町です。町民のニーズから言って、とてもいい内容で、利用したいと思いましたが、条件をクリアするには、かなりハードルが高いと思いきらめかけました。しかし、どうしてもあきらめきれず、直接厚生労働省に電話をしたそうです。そうしたら、利用可能に向けた熱心なアドバイスをいただいたそうです。町民のニーズ実現のために、あきらめず相談したことが、事業展開につながりました。とても勉強になりました。

4 政務活動研修を終えて

6月議会を振り返り思い立った「政務活動研修」でしたが、もっともっと研修内容についての事前研修が必要であることを痛感した「政務活動研修」でした。それは、当別町の施策内容についての把握はもとより、自治体の仕組みや運営、それ以前の行政用語の意味など、あまりにも初歩的な内容についての勉強不足が研修を深め、確かなものにできなかった要因と考えます。それでも、行って見て「勉強不足」を強く実感できたことは大きな成果だったと思います。また、当初の課題解決のための新たな課題をしっかりとつかむことができたことも大きな成果だったといえます。いずれにしても、課題解決に向けた今後の一層の努力が必要であると考えています。

いずれの町村も「過疎法」の適用を受けているところでした。これも、また、今後の「財政」の研究を進める上で大きな課題となりました。